

石碑



案内板



小野宮第址 (『小右記』藤原実資邸址)

[小野宮デジタル・ギャラリー]

Site of the Ono-no-miya Residence
(Residence of Fujiwara Sanesuke who wrote the "Shoyuki")



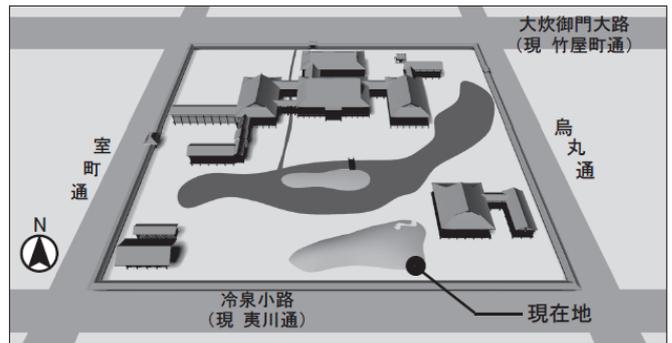
この場所は、平安時代に文徳天皇の皇子・惟喬親王が一町（約 120m）四方に及ぶ御所「小野宮」を構えた跡地で、現在地はその南端に位置します。その後「小野宮」の邸第は関白・藤原実頼が伝領し、その子で『小右記』を著したことで知られる藤原実資（957-1046年）に引き継がれ、その家系は「小野宮流」と称されました。

近年、跡地中心部からは庭園跡が、同北東部からは池跡が発掘されたことから、南庭の南から北東に池が延びていたことが想定されます。また、現在地の北方では泉が湧き出していたことも記録されています。

実資は儀礼や政務に精通する当代きっての見識家として右大臣を務め、同時代の絶対権力者たる「御堂関白」こと藤原道長とは協調しつつも、筋を通す言動を貫いたことで「賢人右府」と讃えられました。また、当時を克明に伝える日記『小右記』には、実資が「小野宮」の邸第に絶えず造作の手を入れていた様子がうかがえ、寝殿を中心に北、東、西たいのやに対屋、南東には念誦堂を配置し、当時は堂々たる「名第」として知られていました。

実資薨去後、邸第は消失して人手にわたり、「小野宮流」も勢威を失っていきます。

【小野宮第 推定再現図】



【詳細は「小野宮デジタルギャラリー」に掲載しています】



1. 「小野宮」について

① 位置と規模

平安京の「左京二条三坊十一町」

北・竹屋町通、南・夷川通、西・室町通、東・烏丸通に囲まれた区画です。

方一町（120M 四方）、1.4ha に及びます。公卿にしか許されぬ規模でした。

② 「小野宮」の由縁

惟喬（これたか）親王がこの地に御所を構えたことに由来します。親王は文徳天皇の第一皇子でありながら、母が藤原家の出自でないことから皇位に就けず、洛中に御所を構えながらも、小野の里（現在の大原）で出家したため親王自身や、洛中の御所も「小野宮」と呼ばれます。

③ 実資による伝領

親王薨去後、御所は関白、藤原実頼（さねより）に引き継がれます。実頼は「小野宮流」の始祖となりますが、藤原北家（摂関家）の嫡流でありながら、天皇の外戚になれなかったために、藤原道長の九条流に押されていきます。その実頼の跡を継いだのが、孫で養子となった実資（さねすけ）[957-1046] です。実資は九条流の摂関家、藤原道長、道頼父子と同時代を過ごし、右大臣として政務を支えつつも、正論を述べるので「賢人右府」とも讃えられます。また、日記『小右記』を60年以上にわたり記録しますが、その文章量の多さや具体性から、たいへん貴重な史料とされています。

④ 邸第の態様

実資は莫大な資産をもって30年あまり掛けて邸第の威容を整えていき、実資自身も90歳の長寿をもって「小野宮」で没します。その邸宅様式は「寝殿造」の典型といえます。寝殿を中心に北、東、西に对屋（たいのや）が配置され、それぞれが渡殿（わたどの）で繋がり、寝殿の南には南庭と池が配置されます。正門は四脚門の西門であり、ここから西中門を通して儀式が行われる寝殿や南庭に出入りしました。近年実施された発掘調査からは、池が敷地の東北部に深く入り込んでおり、池には鍮水が引かれていることが判明しています。また、東南には念誦堂（ねんじゅどう）が配置されており、現地北側では泉が湧きだしていると『小右記』から想定されます。

以上を基に実資が邸第をほぼ完成させた1027年当時の様子を推定再現したのが以下です。

「小野宮」の年表

- 996 旧小野宮焼失
- 999 再建開始、北対に移徙（わたまし）
- 1013 西対に移徙
- 1014 湧泉を見つける
- 1019 寝殿に移徙
- 1021 右大臣就任大宴「天の恵み」
- 1023 東対の修理
- 1024 千古の裳着（もぎ）
- 1025 念誦堂完成
- 1027 鍮水の導水完了
- 1046 実資薨去
- 1057 小野宮焼失

